

〔論 文〕

# 大学生の「具体的殺生行動」に対する認識構造の分析

—「殺生行動」に対する賛否判断理由の水準分け—

三浦香苗・石井正子\*・長谷川千穂\*\*

An Analysis of the Conceptual Structure for “Life Destroying Behavior”  
of University Students

—Classification by degrees of reasons for and against—

Kanae MIURA, Masako ISHII\* and Chiho HASEGAWA\*\*

In this study, in order to clarify ideas on the human life destroying behaviors, 188 university students were required to state their opinions for and against and give reasons for 4 different situations, namely shooting bears, eating chicken that they had raised, cutting down a big tree and hunting rabbit.

There was most approval for shooting bears, and there were many objections to cutting down a big tree.

Their reasons were classified into 7 types: labeled “emotional reaction”, “the human center”, “respect of the life support”, “the human center while the life is respected”, “the conflict condition”, “concession” and “integration”. According to the situation, different reasons were given, and, the for and against opinions rate were different by the judgment type. The “respect of the life support” type tended not to support life destroying behavior, but on the other hand, “the human center” type tended to support it.

*Key words: life destroying behavior (殺生行動), Attitude toward life destroying (殺生に対する態度), analysis of reasons (理由分析), conceptual type (認識タイプ)*

## 【問題と目的】

小中学生による自殺や殺人といった事件が起こるたびに、「いのちの大切さ」についての教育の必要性が叫ばれる。

しかし、「いのち」を大切に扱うということはいったいどのようなことなのであろうか。大切に「いのち」とは、どのような「いのち」であらうか。広く「生き物を殺してはいけない」ということを主

張するとすれば、快適性のために虫を殺すことや日々食卓に供される肉・魚や草木を口にすることをどう説明するのであろうか。

学校教育の現場でさまざまな動物を飼育し、生き物にふれあう機会を設けることは従来から広く行われている。一歩進んで、「いのち」について考えさせる授業として、子どもたちが飼育した動物の食肉処分について話し合うといった実践もいくつか行われている（黒田 2003, 村井 2001, 2002, 村井他 2004,

\* 植草幼児教育専門学校 (Uekusa Kindergarten Teacher Training School)

\*\* 武蔵大学学生相談室 (Musashi University, Students' Counseling Center)

NHK 2003, 鳥山 1985)。飼ってきた生き物を、最終的にどうするかという選択過程をとおして、「殺生行動」を否定する意識と、人間の生が何らかの殺生活動の上に成り立っているという事実の両方に目を向けさせ、「いのちの大切さ」を教えようとする試みである。ペットとして動物を飼育することから踏み出して自分たちの手で育てた「いのち」を食べることは是非を問うことによって、単に「殺すのはかわいそう」という意識にゆさぶりをかけ、「殺す」「殺さない」の賛否を問うレベルから「何のために殺すのか」という「動機」についても考えさせることを重視している。しかし、そういった経験によって、児童の認識にどのような変容をもたらし、それがその後の日常生活の中でどのような変化を起しているのかについての体系的な分析はなされていないのが現状である。

ピアジェ (Piaget, J. 1952) は、規則の認識や道徳に関わる多くの問題についての判断はいくつかの発達段階を経るという仮説を提示した。自己中心性から自由になり、他者の立場に立って考えられるようになる、すなわち他律的段階から、自律的段階への発達である。児童・青年期に限定されたピアジェの仮説を生涯発達の観点から発展させ、道徳性の認知発達の段階を想定したのがコールバーグである。コールバーグ (Kohlberg, L. 1971) はピアジェと同様、非可逆的な順序性を持った発達段階を想定しているが、直接的に年齢と対応したものではなく、年齢上昇に伴ってステージが上昇するとは限らないと述べている。さらに、彼は社会的経験が道徳性の発達を促す要因であるとし、教育によって発達段階の移行が促進されるとしている (日本道徳性心理学研究会編 1992)。

筆者らは、「殺生行動に対する意識」に関しても、道徳判断に類似する認知発達の水準が存在し、この認識構造の水準は種々の情緒的社会的経験によって変化するのではないかと考える。もしもこのような考えが正しいのであれば、「いのち」についての教育は教育対象となる子どもたちがどのような水準の「殺生行動に対する意識」を持っているかを明らかにし、それに基づいた働きかけを行わなくては、そ

の効果が期待できないことになる。また、前述したような教育実践が児童・生徒の認識水準にいかなる変化を生ぜしめたかを明らかにしなければ、その効果を論ずることはできないと考える。

本研究では、小・中学生の「殺生行動」に関する意識を見る測度を構成するための予備意識調査として、大学生を対象として幾つかの具体的殺生場面を提示し、「殺生行動に対する意識」についての水準確定を試みるものである。

## 【方 法】

1. 調査対象: 教員養成系国立大学の学生189名。  
内、男子52名 女子135名である (無記名1名を含む)。著者らが担当した、生徒指導・教育相談・進路指導に関する選択科目の講義の受講生で、その大半は大学2年生である。
2. 調査時期: 2004年1月下旬
3. 調査内容: 調査内容は、今回の分析の対象とする4場面の「殺生行動の賛否とその理由」の質問項目以外に、野外体験・ペットの飼育・近親者の死・残虐なゲーム・食物採取などの経験をたずねた「生活体験」、暴力否定・障害児排除・体験重視・高齢者排除などに関する価値観をたずねた「価値観」、残虐な殺生・目的的殺生・魚介類の殺生・快適性のための殺生などの可能性をたずねた「殺生行動」の項目がある。「生活体験・価値観・殺生行動」に関する質問項目結果については選択肢法で回答を求めたものであるが、今回は言及しない (石井他 2004を参照のこと)。

## 【結 果】

### 1. 殺生行動についての賛否の単純集計

賛否の選択肢への記入およびその理由記述が皆無であった1名を除いた188名を以後の分析の対象とする。

提示した4場面と殺生への賛否の結果は次のとおりであった。

場面1: 『住宅地にえさをとりに頻繁に出没している熊が危険なので、銃で撃って殺す』

「1：賛成 (12.8%)」「2：やや賛成 (18.1%)」「3：どちらともいえない (20.7%)」「4：やや反対 (29.8%)」「5：反対 (18.6%)」

平均値：3.23 標準偏差：1.30

平均値は「どちらともいえない」よりやや高い値であり、最頻値は「やや反対」である。ただ、他の3項目よりは相対的に低い値で、賛成の傾向に近い。最近熊が住宅地にえさを求めて出没し、その多くが射殺されている現状から当然うなずける結果である。

場面2：『小学校の体験学習の一環として、ひよこの時から飼っていたニワトリをきばいてたべる』

「1：賛成 (6.4%)」「2：やや賛成 (13.8%)」「3：どちらともいえない (22.9%)」「4：やや反対 (18.6%)」「5：反対 (38.3%)」

平均値：3.69 標準偏差：1.29

1と2の「賛成」の合計は20%程度で、4と5の「反対」は55%を超える。

場面3：『日当たりを良くするために、構内の樹齢100年の大木を切り倒す』

「賛成 (2.7%)」「やや賛成 (2.7%)」「どちらともいえない (16.0%)」「やや反対 (27.7%)」「反対 (50.5%)」

平均値：4.19 標準偏差：1.03

1と2の「賛成」の合計は、6%以下で、過半数が「反対」であり、「やや反対」を含めると80%に近い。4項目の中で平均値が最も高く、反対傾向が強い。

場面4：『趣味として山野でウサギや山鳥を銃で撃つ』

「賛成 (2.1%)」「やや賛成 (3.2%)」「どちらともいえない (21.8%)」「やや反対 (21.8%)」「反対 (51.1%)」

平均値：4.16 標準偏差：1.01

1と2の合計は6%以下で、過半数が「反対」であり、「やや反対」を入れると70%以上である。場面3と比べると「どちらともいえない」の比率が多い。

4項目間の平均値に差があるか否かを見たところ、場面3 = 場面4 > 場面2 > 場面1 と  $P < .001$ 水準で有意であった。大木の伐採は現実には方々で実施されているのに、「反対」の傾向が高いのは、意外な結果である。

## 2. 理由の分析

ここでは、賛否の理由を分類し、殺生行動に対する賛否と理由との間の関連を見る。

### 1) 理由の水準分け

自由記述された反応項目をKJ法に基づき、「感情的反応」「人間中心」「生命維持の尊重」「生命の尊重をしながらも人間中心」「葛藤状態」「譲歩」「統合」という7つの水準に分類した。分類の妥当性をみるために、共同研究者1名を含む3名に分類を依頼し、その一致度をみた。4名が一致した項目は、83%であった。不一致のものは筆者らで協議を行い、3名以上が一致した水準をその項目の水準とした。

各水準に分類した回答は下記のとおりである。

水準1 感情的反応 (自分自身の感情のみに基づいたもの)

11 やりたくない (できない) 12 かわいそう 13 残酷すぎる 14 理解できない

水準2 人間中心 (人間にとっての利害を価値判断の基準としたもの)

21 日当たりを保つのは当然 22 日当たりのためならしょうがない 23 趣味で行うのは良い 24 子どもにとっていいならそうすべき 25 人が襲われたら危険だから 26 人間の安全が第一 27 必要性を感じない 28 殺す場面を見ることは子どもにとって悪影響である 29 趣味でやるのはいけない

水準3 生命維持の尊重 (「生命は大切」という意識に基づいた判断であるが、敷衍型)

31 自然は大切 32 命は大切で、粗末に扱うのは良くない 33 動物の虐待に反対 34 食べるなら殺しても良いが、殺すのを楽しむだけはいけない 35 人間の都合で動物を殺すことは賛成できない 36 自然を壊したのは人間であり、自然のものを殺す権利はない 37 愛着のあるニワトリを殺すのは抵抗がある

水準4 生命の尊重をしながらも人間中心（生命の尊重・自然保護の概念を持ちつつ最終的には人間中心の考えを基準に判断）

41 もったいないが仕方がない 42 歴史のある木はむやみに切るべきではないが、不便に思う人が多いのであれば、しょうがない 43 食べるのなら仕方がない 44 ただ切り倒すのは反対だけど、その木を有効に使用するならよい 45 生き物を殺すのは抵抗があるが、危険性を踏まえるとしょうがない 46 命を軽視しているようだが、しょうがない 47 人間の勝手に殺すことは本来許されないが、人間の命を守るためにはしかたがない 48 命の尊さを理解することができるが小学生の情緒に悪影響がある 49 安全のためにはあるが殺すことはない

水準5 葛藤状態（生命の尊重と人間の尊重に対する葛藤状態）

51 他の方法があるかもしれない 52 日当たりも大切、でも木も大切だから 53 日当たりも大切だが、歴史ある木を切るのは惜しいから（かわいそう） 54 人命は大切だが、動物を簡単に殺すのもよくない 55 人間の都合で命を奪うのも嫌だし、危険があるのも嫌だ 56 このような環境を作ったのは人間の責任だが、安全も大事 57 人間と熊は共存するべきなので、どちらを優先すべきか分からない 58 食物の大切さと生命の尊さを考えてしまう

水準6 譲歩（葛藤状態を経て、社会的な視点を基準に判断しているもの）

61 制限を持ち、狩りをすればよいと思う 62 生態系を崩さない程度であればよい 63 日当たりよりも大木の価値が大きいので切らない方がよい 64 樹齢100年以上の木から歴史や生物など様々なことが学べる 65 食べ物について知ることは大切だが、飼っていたニワトリを使うのはよくない 66 人間の責任であるのに殺すのは賛成できないが、危険でもある 67 命の大切さを教える必要はあるが、情が移ったひよこを食べるのは抵抗がある 68 森を守り、熊の生活環境を整えるべき 69 後の環境を考えて木を切り倒すべきでない

水準7 統合（葛藤状態を経て、生命の尊重と人間の尊厳を考慮した上で、社会的視点から判断し、統合されているもの）

71 食べ物への感謝、理解が生まれる 72 現実を知る必要がある 73 残酷だが、命の尊さを教えるためには必要 74 日当たりは大切であるが、これまで生活できたのであるから、今後も無理とはいえない 75 ニワトリをさばいて食べるという経験は必要だが、愛着のあるひよこを使うのは良くない 76 命の大切さを知ることと、育てていたひよこをさばくことは主旨が違う 77 もともとは人間の責任であるから、殺さずにすむ方法を考えるべき

## 2) 場面別水準分布

場面ごとの、各水準の反応の頻度と賛否との関連、また、場面を合わせた結果を示したものが表1である。数値は、すべて全被験者を母数とする百分率で

表1 場面別水準別賛否率

	S1: 熊の射殺				S2: 鶏の食肉処理				S3: 大木の伐採				S4: 狩猟				合計			
	賛成	どちらでもない	反対	計	賛成	どちらでもない	反対	計	賛成	どちらでもない	反対	計	賛成	どちらでもない	反対	計	賛成	どちらでもない	反対	総計
0	2.7	3.2	5.9	11.7	1.1	6.4	9.6	17	1.1	6.4	15.4	22.9	1.1	7.4	12.8	21.3	1.5	6.5	11.5	20.2
1	0	1.1	0	1.1	0	0.5	9	9.6	0	0	0.5	0.5	0	1.1	8	9	0	0.7	4.4	5.2
2	21.3	1.6	1.6	24.5	1.1	2.1	17.6	20.7	2.7	2.1	0.5	5.3	0.5	5.3	18.1	23.9	6.3	2.3	9.1	17.7
3	0	2.1	9.5	11.7	0	1.1	10.1	11.2	0	0	16.5	16.5	0.4	3.2	31.4	35.1	0.1	1.6	16.7	18.4
4	3.2	3.2	2.7	9	1.6	3.7	2.7	8	1.1	1.1	0.5	2.7	1.1	1.6	0	2.7	1.7	2.4	1.5	5.6
5	3.2	8	22.3	33.5	0	1.1	2.1	3.2	0.5	5.9	10.6	17	0	0	1.1	1.1	0.9	3.7	9	13.6
6	1	0.6	1.1	2.7	0.5	1.1	3.2	4.8	0	0.5	30.9	31.4	2.1	3.2	1.6	6.9	0.8	1.3	8.9	11
7	0	0.5	5.3	5.9	16	6.9	2.7	25.5	0	0	3.2	3.2	0	0	0	0	3.8	1.9	2.8	8.5

示した。

場面によって、水準の分布は大きく異なっている。場面1の「熊の射殺」では、「5：葛藤」が33.5%と最も高く、続いて「2：人間中心」の24.5%であるが、場面2の「鶏の食肉処理」では、第1位が「7：統合」の25.5%で、続いて「2：人間中心」である。場面3の「大木の伐採」では、「6：譲歩」の31.4%が第1位で、第2位が「0：無記入」の22.9%であり、場面4の「狩猟」では、第1位が「3：生命維持の尊重」の35.1%で、第2位が「2：人間中心」の23.9%である。

4場面を合計したものでは、「0：無記入」が20.2%で第1位、「3：生命維持の尊重」が18.4%で第2位、「2：人間中心」の17.7%が第3位となる。第4位は、「5：葛藤」の13.6%で、これまでが10%以上である。場面によって、判定された水準が大きく異なっている。

### 3) 賛否と理由水準との関連

場面によって選択された賛否の比率が異なること、また記述された理由の水準の分布が異なることが明らかになった。そこで、賛否とそれらの理由水準との関連を見た。この結果も表1に示してある。

場面1の「熊の射殺」では、第1位に分類された「5：葛藤」では、「反対」が「賛成」の7倍近く多く、第2位の「2：人間中心」では逆に「賛成」が13倍以上に多い。場面2の「鶏の食肉処理」では、第1位の「7：統合」では「賛成」が「反対」のおよそ6倍、第2位の「2：人間中心」では「反対」が「賛成」の16倍である。場面3の「大木の伐採」では、第1位の「6：譲歩」を理由にした被験者の殆どは「反対」であり、「賛成」は皆無である。第2位の「5：葛藤」でも、「反対」が過半数を占め、「賛成」の21倍以上である。場面4の「狩猟」では、第1位の「3：生命維持の尊重」を理由にしたものの88%は「反対」であり、第2位の「2：人間中心」でも76%が「反対」である。

4場面を合わせたものの第1位の「0：無記入」では、「反対」は「賛成」の7倍以上である。第2位の「3：生命維持の尊重」ではその90%以上が

「反対」であり、第3位の「2：人間中心」では、「反対」は51%に過ぎず、「賛成」反応の比率は最も高い。

このように、殺生行動の賛否とその理由との関連は、具体的場面により異なり、全体平均の結果を見て、単純に「賛成」選択の場合には、「2：人間中心」とか、「反対」を選択する場合には、「3：生命維持の尊重」などが多いなどと単純化して考えることの危険性を示している。

### 3. 理由水準のタイプ分け分析

ここでは各個人の理由水準を確定し、理由水準と殺生行動への態度との関連を見る。

#### 1) タイプ分け

場面1から4までの4場面での各被験者の理由水準の分布から以下のようにT0～T7のタイプ分けを行った。結果は以下のとおりで、そのタイプの出現頻度を%で示す。

T0: 理由記述が2以下のもの	17.6
T1: 1を選択したものが2つ以上のもの	2.7
T2: 2を選択したものが2つ以上のもの	18.6
T3: 3を選択したものが2つ以上のもの 或いは2種選択の上位の水準が3 或いは選択された上位より2番目の水準が3	16.5
T4: 4を選択したものが2つ以上のもの 或いは2種選択の上位の水準が4 或いは選択された上位より2番目の水準が4	6.4
T5: 5を選択したものが2つ以上のもの 或いは2種選択の上位の水準が5 或いは選択された上位より2番目の水準が5	20.7
T6: 6を選択したものが2つ以上のもの 或いは2種選択の上位の水準が6 或いは選択された水準の上位より2番目が6	13.8
T7: 7を選択したものが2つ以上のもの	3.7

表2 タイプ別場面別賛否分布

タイプ	人数	場面			S1: 熊の射殺			S2: 鶏の食肉処理			S3: 大木の伐採			S4: 狩猟		
		賛成	どちらでもない	反対	賛成	どちらでもない	反対	賛成	どちらでもない	反対	賛成	どちらでもない	反対			
T0	33	9	10	14	7	8	18	2	9	22	2	7	24			
T1	5	1	2	2	0	0	5	1	1	3	0	0	5			
T2	35	22	6	7	6	5	24	5	7	23	2	6	27			
T3	31	6	3	22	7	3	21	0	3	28	0	7	24			
T4	12	5	3	4	2	3	7	0	4	8	1	4	7			
T5	39	5	9	25	4	13	22	1	5	32	0	9	30			
T6	26	9	5	12	9	8	9	1	1	24	4	6	16			
T7	7	1	1	5	3	3	1	0	0	7	1	2	4			

表3 タイプ別賛否の全体傾向

タイプ	人数	選択肢別分布					全体傾向	
		賛成	やや賛成	どちらでもない	やや反対	反対	平均	SD
T0	33	9	5	26	27	33	3.67	0.73
T1	5	5	5	15	35	40	4	0.18
T2	35	11	13	17	19	37	3.58	0.73
T3	31	3	7	13	23	54	4.17	0.44
T4	12	2	13	29	17	38	3.73	0.61
T5	39	1	5	23	25	45	4.06	0.53
T6	26	6	16	19	26	33	3.63	0.68
T7	7	4	14	21	39	21	3.61	0.57

最も出現頻度の高かったタイプは、「5: 葛藤」が多いT5で「葛藤型」と命名されよう。全体のおよそ20%である。次は、「2: 人間中心」が多いT2で18.6%、「人間中心型」と命名できよう。続いて「0: 無記入」が多いT0で「無記入型」の17.6%、「3: 生命維持」が多いT3で「生命維持型」の16.5%となる。「6: 譲歩」が多いT6の「譲歩型」は13.8%で、これまでが10%を超える。この5タイプで、全体の87%を占める。最高の水準の型であると考えた「T7: 統合型」は、わずかに3.7%であった。

## 2) タイプによる賛否の結果

タイプ別の賛否の結果を表2に示す。また、表3は4場面を通じての「賛成」から「反対」までの反応分布をタイプ別に百分率で示し、同時にその平均と標準偏差を示したものである。

最も出現頻度の高い「T5: 葛藤型」では、4場面ともに「反対」が多く、4場面を合わせた「賛成」と「やや賛成」の合計は10反応でわずか6%である。次に出現頻度の高かった「T2: 人間中心型」では、4場面を合わせた「賛成」と「やや賛成」の合計は35反応で、24%を占める。「T5: 葛藤型」とは、賛否の傾向では対極をなす。3番目に出現頻度の高かった「T3: 生命維持型」はむしろ「T5: 葛藤型」とは類似の傾向である。次に多い「T6: 譲歩型」は、4場面のいずれにおいても「反対」が「賛成」より多く、「T2: 人間中心型」に近い。筆者らが最も高い水準の型であると想定した「T7: 統合型」は賛成傾向も否定傾向も極端でない型であるといえよう。

このように、型によって、賛否の傾向は異なり、しかもそれは必ずしも筆者らの想定した判断の水準とは1次的な関係ではないことが明らかになった。このことは、ここで判断を求めた4場面での「殺生行動」に対する見解が直線的に発展するのではなく、「賛成」から「反対」、それからまた「賛成」あるいは「どちらともいえない」というように、ジグザグに発展していくことを示唆する。

## 4. まとめと討論

### 1) まとめ

本研究では、188名の教員養成系大学生に、「住宅地で出没する熊の射殺」、「飼育していた鶏を食すること」、「日当たりのじゃまになる大木の伐採」、「趣味で行う狩猟」についての賛否を5段階で尋ね、ま

た、そう考えた理由を尋ねたものである。4場面を通して殺生をすることに否定的見解が多かったが、最も否定的なものは、「大木の伐採」であり、「趣味の狩猟」がそれに続き、「熊の射殺」は相対的に賛成率が高かったが、それでも半数に近いものが「反対」や「やや反対」を選択していた。

賛否の理由は、「感情的反応」「人間中心」「生命維持の尊重」「生命の尊重をしながら人間中心」「葛藤状態」「譲歩」「統合」の7水準に分類された。4場面平均では、出現率は「生命維持の尊重」が最も高く、続いて「人間中心」であり、前者に「反対」の傾向が高く、後者は「賛成」の傾向が高かった。しかし、理由の水準の分布は場面によって異なり、また、理由と賛否との関連も場面によって異なっていた。

各個人がどの水準にいるかを見たところ、「葛藤状態型」が21%と最も多く、「人間中心型」の19%、「生命維持の尊重型」の16%、「譲歩型」の14%と続いた。型と賛否の間にも関連が見られたが、反対傾向は、「生命維持の尊重型」に高く、続いて「葛藤状態型」、「感情型」の順であった。

## 2) 討 論

### (1) 反対の意見が多かった。

筆者らが使用した4場面は、学生らに殺生行動ができるかどうかを見た先行研究で異なる因子に属する項目で、かつ、日常生活で比較的良好に実行されている殺生場面から選択したものである。筆者らは、賛否が相半ばすることを予想していたのであるが、想定よりも反対の意見が多かった。場面1の「熊の射殺」については、「住宅地にえさをとりに頻繁に出没している熊が危険なので、銃で撃って殺す」という条件下であり、現実には多くの地域で射殺されている。しかし、学生たちの反応は相対的には賛成傾向が高かったものの、賛成の合計は30%に過ぎなかった。先行研究では、植物を除去することには抵抗が無かったのに、場面3の「構内の大木の伐採」は、78%が反対で、筆者らの予想に反するものであった。これは、単に邪魔な木を伐採するというよりも、大木であるために、「惜しい」という気持

ち、あるいは古くから日本にある「木魂」信仰によるものであったかもしれない。他の2場面は、この両場面の間に位置していたが、「狩猟」が「大木の伐採」よりも有意ではないが、反対の傾向が低かったのは意外な結果であった。

### (2) 理由は7水準に分類された。

自由記述された殺生行動の理由は、7水準に分けられた。これらの水準分けは、各記述を小分類し、それらを大きくまとめるという手続きによって作成されたものであるが、ピアジェやコールバーグの発達段階分けも考慮の対象とした。この水準は賛否傾向とは明らかに関連があるが、両者は必ずしも対応するものではなかった。つまり、同一水準の理由を述べた被験者の中には、「賛成」から「反対」までの意見の相違がありうるということである。また、筆者らが想定した水準の順序と賛否傾向とは一次的な傾向には無かった。これは認識の水準が向上し、より多くのことを考慮することによって、殺生行動に対する見解がより高いレベルに発展するが、それが必ずしも賛否を決定するものではないことを意味する。

### (3) 認識は7タイプに分類された。

4場面自由記述された理由の水準分けから各個人の型を類別し、7タイプを作成した。各タイプの4場面での賛否および4場面平均の賛否率を求めたところ、タイプによって、差異が認められ、「T3: 生命維持の尊重型」が最も反対傾向が高く、続いて「T5: 葛藤型」と続き、最も低い値のものは「T2: 人間中心型」であった。この結果は、タイプの型分けの妥当性を傍証するものと考えられる。

### (4) 殺生行動に関する先行研究との関連

筆者らのこれまでの研究の中で、人が殺生行動に対して持つ賛否の認識は、殺生行動が「嗜虐的殺生」、「生存のための殺生」、「教育活動としての殺生」かによって異なること、そして、そういった認識に、生活経験や価値観が影響を与えていることが明らかになってきた(三浦他 2004, 石井他 2004, 長谷川他 2004)。

これまでの研究では、さまざまな状況での殺生を「できる」か「できない」かを聞いてきたが、殺生

行動が可能であるか否かとそれを肯定するか否定するかは、同一ではないということが問題となり、今回は、その賛否を問うこととした。その場合に、殺生行動の賛否だけではなく、「なぜそう思うのか」という理由に焦点をあてなければ、「いのちに対する意識」には迫れないということで本調査項目を作成した。

そして、こういった認識の持ち方を単に個人的な意見の違いとしてとらえるのではなく、根底にある認識構造の水準の違いととらえ、7つのタイプに分けることを試みた。単純に「かわいそうだから殺すことはできない」というような感情的反応レベルから、「残酷ではあるが、殺して食べることで、食べ物への感謝と理解が生まれる」というような統合のレベルに至るまでの段階を、仮説的に殺生行動に対する認識水準のちがいととらえようとしている。

今後は、これまで調べてきた、「殺生行動に対する意識」、「生活体験」、「価値観」といった要因とこの認識水準との関連を調べることで、具体的殺生行動を生起させるときに生じる感情や判断の機制と、そこにどのような生活体験が影響を及ぼしているのかについてあきらかにしていきたい。

また、「具体的殺生行動に対する意識には認知的水準の違いが存在する」という仮説を検証するためには、いくつかの異なる年齢段階の子どもや大人に同様の調査を実施し、水準1から水準7までの分布がどのように変化しているのか、また意図的な教育的働き掛けによって、水準がどのように変化するかを調べていく必要がある。

#### 引用・参考文献

- 石井正子・三浦香苗・鈴木陽介 2004 「いのち」に関わる意識と生活体験 3 - 生活体験・価値観尺度の再検討と殺生行動との関連 - 日本教育心理学会 第46回総会発表論文集 P349
- 長谷川千穂・三浦香苗・石井正子 2004 「いのち」に関わる意識と生活体験 4 - 具体的殺生行動に対する意識の分析 - 日本教育心理学会 第46回総会発表論文集 P350
- Kohlberg, L. 1971 "From Is to Ought: How to commit the naturalistic fallacy and get away with it in the

study of moral development" Mischel, T. (ed) Cognitive Development and Epistemology, 1971 (永野重史編1985『道徳性の発達と教育 - コールバーグ理論の展開』 新曜社)

- 黒田恭史 2003 『豚のPちゃんと32人の小学生 命の授業900日』 ミネルヴァ書房
- 三浦香苗・長澤陽平・石井正子 2004 大学生向け殺生行動尺度の作成の試み - 子ども時代の生活体験の効果の分析を通して - 学苑 761号 人間社会学部紀要 昭和女子大学 27-39
- 村井淳志 2001 『「いのち」を食べる私たち』 教育資料出版会
- 村井淳志 2002 「『ニワトリを育てて食べる授業』の是非を問う」『世界』2002年5月号 岩波書店
- 村井淳志・坂下ひろこ・佐藤真紀 2004 『いのちって何だろう』 コモンズ
- 日本道徳性心理学研究会編 1992 『道徳性心理学 - 道徳教育のための心理学』 北大路書房
- NHK「こども」プロジェクト 2003 『4年1組命の授業 金森学級の35人』 日本放送出版協会
- Piaget, J. 1952 Moral Judgment of the Child (大伴茂訳 1957『児童道徳判断の発達』 同文書院)
- 鳥山敏子 1985 『いのちに触れる』 太郎次郎社

(みうら かなえ 生活機構研究科)

(いしい まさこ 植草幼児教育専門学校)

(はせがわ ちは 武蔵大学学生相談室)